

教室のプロクセミックス

— 座席位置の分析 —

渋谷昌三

教室の座席の位置は個々の学生についてさまざまな情報を提供してくれる。そこで本論文では、personal space となわばり (territory) の観点から、座席の位置と学業成績および性格との関係を分析した。この分析のために、座席調査を計8回、連続して行なった。学業成績は調査を実施した授業の試験結果であった。性格はMASとY-G性格検査によって調べられた。

分析の結果は次の通りであった。(1)教室の後方の席と出入口に近い領域の席の利用頻度がとくに高かった。(2)教室の中央部分の後方に座る学生の成績が最も悪かった。(3)教室の出入口に近い領域に座っていた学生は、他の領域に座っている学生に比べて、不安傾向が高かった。

また事例研究から、座席の移動軌跡とY-G性格検査の結果との間には密接な関係のあることが見いだされた。

1. 小集団のプロクセミックス

ある場所の空間的な意味を明らかにすることはプロクセミックス (proxemics) の研究テーマの一つである。人がそれぞれの場所でのどのような対人的な空間配置に従った行動をとるかにについては、なわばり (territory) やパーソナル・スペース (personal space) の概念で説明されている。そこで、これらの概念の違いを明確にするため、最初に、小集団場面における従来の諸研究の再考を試みた。

(1) 小集団におけるなわばり

なわばりとは、本来、ある動物が一定の土地を自分のものと主張する行動を説明するために用いられる比較行動学概念である。動物においては、なわばりを維持し同種内攻撃を抑制するために、個体密度の調整機能として spacing が重要な役目を果たしている。Hediger, H.

(1950)¹⁾は、動物はこの spacing 維持のために、異種間と同種間にそれぞれ2種類の距離帯があると考えている。

動物にみられるこうした距離帯の考え方をもとに、人におけるなわばり行動が研究されるようになった。渋谷(1981)²⁾は、公園の芝生に座って話をしている男女のペアの行動を調査しているが、ペア数が5~8の場合には各ペア間の距離は25m前後であり、お互いに等間隔になるように座っていることが観察されている。また、Edney, J. J. & Jordan-Edney, N. L. (1974)³⁾のアメリカコネチカットの砂浜での調査によると、男女ペアのなわばりは半径262cmであった。Smith, H. W. (1981)⁴⁾の同様の調査によると、フランス人では225cm、ドイツ人では77cmであった。

一人だけのなわばりの大きさは、アメリカ人は男287cm女182cm (Edney, J. J. たち, 1974)³⁾、フランス人は男411cm女342cm、ドイツ人は男180cm女162cm (Smith, H. W., 1981)⁴⁾である。調査内容の相違も考慮しなくてはならないであろうが、以上の結果は、人種によってなわばりの大きさに違いがあることを示している。

またグループのなわばりは、Edney たち³⁾によると、グループの人数が増すと大きくなる (ただし、3人グル

ープは最小であった)が、一人当たりの占有空間はグループが大きくなるほど小さくなった。各グループの持物(これはなわばりの目印とみなすことができる)は、単独の人が5.8個、2人4.0個、3人3.9個、4人2.9個、5人以上1.5個であった。この研究では、グループの人数が多いほどなわばりの目印としての私物の数が減少していることが観察されている。

なわばりを示す目印が他者の侵入を妨げる効果は、目印の内容(私物であるかどうか)と場所柄(社会的規範の内容)による(Hoppe, R.A.ら, 1972)⁵⁾と考えられる。ところが、Smith, H.W. (1981)⁴⁾の私物調査の結果からわかるように、グループの人数が多いときには、なわばりを維持し続けるためにその目印である私物を誇示する必要性のないことが示された。

一方、一人だけで自分のなわばりを守るためには、図書館の机に一人で座っている女子大学生への侵入実験(Felipe, N.H.とSommer, R., 1966)⁶⁾で明らかにされたように、なわばりの目印として自分の周囲に私物(本、カバン、コートなど)をできる限りたくさん置くだけでなく、肘や腕を突っ張ったり、身体を侵入者と反対の方向に向けたりするなどの行動が観察されている。

ところで、こうしたなわばりを持つことができない人もいる。市橋(1979)⁷⁾は、分裂病者の病院内寛解という現象をとりあげ、分裂病者は社会の中に自らのなわばりを作ることができないために、病院という場所に囲われるという特有な空間依存を生じているのだと述べている。ある症例では、医者や看護婦が病院の外に患者自身のなわばりを作ってやることで症状が改善され、社会生活ができるようになった、と報告されている。

(2) 小集団におけるパーソナル・スペース

小集団の中での人の空間行動に関しては、Sommer, R. (1969)⁸⁾が先駆的な研究を行なっている。彼の研究によれば、テーブルでの座席の選択は出会いの目的と場所柄によって決定されることが明らかにされている。出会いの目的に応じた座席選択の例として、2人が相互作用を期待しているときにはテーブルの角をはさんだり、あるいは向かい合って座るが、相互作用を望まないときにはテーブルの対角線上にあるできるだけ離れた席や末端部の席を選択する、ことなどがあげられる。

場所柄に応じた座席選択の例としては、相互作用が奨

励されるような喫茶店や談話室ではテーブルの角をはさんだり、あるいは向かい合って座るが、相互作用の避けられる図書館ではテーブルの対角線上にあるできるだけ離れた席や末端部の席を選択する、ことなどがあげられる。

重要な会議や儀式の際には、参加者の座る位置が問題となる。一般に、参加者の中で重要な人物や指導的立場の人、上司などは上座と呼ばれる席に座るし、他の出席者はこの上座を避けて座るという行動がしばしば見つけられる。Hare, A.P. & Bales, R.F. (1963)⁹⁾は、長方形のテーブルの短い辺と長い辺の中央の席は討議の方向性を支配し、リーダーシップがとりやすい場所であることを確かめている。こうしたことから、これらの席が上座に相当する空間であることがわかる。

以上のような空間行動は次のように解釈できる。第1に、①相互作用を望むか否かに応じて、二者間の距離が席の位置によって調節されていた。席が近いこと、すなわち、二者間の距離が近いことは相互のパーソナル・スペースが小さくなることであり、他者とのコミュニケーションが緊密になることを意味している。②リーダーシップがとりやすい席は、パーソナル・スペースを利用して、自分と他の参加者との関係を自らの意向に従って緊密にすることのできる有利な位置であるといえる。

第2に、二人が出会ったときの座席位置の選択行動はパーソナル・スペースの概念で説明できる。パーソナル・スペースとは、人が他の人との間に習慣的に置く空間である。パーソナル・スペースはその人の影響力の及ぶ領域であり、他者との相互交渉の多くはこの空間の中で行われていると考えられる(渋谷, 1985)¹⁰⁾。テーブルでの二人の席の座り方は、お互いのパーソナル・スペースをどのように、そしてどの程度まで深く重ね合わせればいいのかを調整するための選択行動であった。というのは、それぞれのパーソナル・スペースにお互いが深く包摂されればされるほど、より一層緊密な相互交渉が要求されるからである。

(3) 教室での座席選択行動

大学の講義室の学生たちは授業のために集まった集団であり、Allport, F.H.の分類に従うと、共行動集団に似ている。共通刺激は、教師と学生との人間関係、そして、講義内容ということになる。

Levine, D.W.ら(1980)¹¹⁾の研究によれば、学生が自

由に座席を選んで授業を受けた場合には、後方よりも前方に座っていた学生のほうが学業成績がよかった。また、学生の席をランダムに指定した場合には、前後の座席位置と成績との関係はみられなかったが、前方の席に指定された学生のほうが後方の席の学生より授業中の発言が多く、授業にも積極的に参加するようになった。これは学生の授業にたいする態度の変化を示している。

この研究のために前方の席に座らされた学生が授業への参加意識を強く持つようになったのは、教師とのeye-contactが多くなり、しかも教師との距離も近くなったので、授業に参加することへの圧力が強まったためと考えられる。教室という状況下での集団には、教師と個々の学生との一対一の対人関係が存在することがわかる。すなわち、学生の教師に対するパーソナル・スペースが重要な意味をもっていることが示唆されている。

授業に対する学生の態度はその出欠状況とも関係する。Stires, L. (1980)¹²⁾の調査では、前方より後方に座る学生のほうが欠席率が高く、しかも後方の席に座る学生は、講義が聞きづらいとか黒板などが見づらいという不満を訴える者が多かった。

その他、講義に出席した学生の座席位置は教師に対する学生の態度を反映している。Becker, F.D.ら(1973)¹³⁾は、前方に座る学生は教師に対して好意的であり、教師と自分がよく似ていると認知していることを見出している。

Sommer, R. (1969)⁸⁾の研究では、相互作用を望まないときにはパーソナル・スペースを大きくとることが認められている。こうしたことからすると、教師あるいは授業に対して何らかの理由でネガティブな気持を持っている学生は、講義室の後方の席に座ることにより大きなパーソナル・スペースを確保しようとしていることが考えられる。また、小集団ではリーダーシップのとりやすい位置のあることがわかっているが、講義室でも授業が聞きやすい位置というものがあると思われる。

座席位置と性格特性との関係については北川(1980)¹⁴⁾の研究がある。女子短大生にいつも座っている席を質問紙で尋ね、座席の位置とY-G性格検査による性格特性との関係が調べられている。それによると、前列の者ほど安定的で後列の者ほど不安定的であるとか、前寄りあるいは後ろ寄りの者ほど積極的で中央の者は消極的である、などの結果が報告されている。

精神医学者の平尾と台(1964)¹⁵⁾は、講堂での授業に

出席する医学部学生の座席位置を2ヵ月間にわたって調査した。その結果、大半の学生が好んで座る席はほぼ固定した分布内にあり、授業ごとに席を極端に変える学生は何らかの問題(ある学生は結局落第してしまったと報告している)を持っている場合が多いことがわかった。受講学生の座席移動のパターン化の試みから、精神分裂病者を含む問題学生群には独特なパターンが見出せるのではないかと述べている。

また、精神医学者の深沢、西形、菱山(1965)¹⁶⁾は、慢性分裂病の入院患者を対象として、約1年間にわたって平尾たちと同様な調査を行なっている。その結果、一般学生が好んで集合するような領域への定着性は低く、前方および後方に偏って定着する者の多いことなどが観察されており、慢性分裂病者特有の行動が見出されている。

平尾たちや深沢たちの座席調査で明らかになったことは、一般に、参加回数を重ねるうちに、座席の位置は固定する傾向があるということであった。こうした特定の場所に対する固執的な行動から、座席選択にはパーソナル・スペースだけでなく、なわばり行動も見られることがわかる。

2. 研究 I : 講義室での学生の着席行動の分析

講義室での学生の座席選択に関する諸研究の検討を通して、講義室という空間の中での座席の位置には、学生の態度、教師に対する好み、性格特性、集団への適応度などが表わされていることがわかった。また、学生が好んで座る特定の座席は、教師に対するパーソナル・スペースを意味すると同時に、集団の中でのなわばり行動も意味していることがわかった。

本研究では、講義室という空間の中で座席という場所が持つ意味を明らかにするため、次のような生態学的な調査を試みることにした。

①講義への出席を繰り返すうちに、講義室という空間の中の特定の場所に着席位置が固定化するという行動がみられるならば、そこにはなわばりが形成されたと考えることができる。そこで、なわばりを形成する学生と形成しない学生の違いが何であるのかを明らかにする。

②教師に対する学生のパーソナル・スペースは講義室の座席選択行動を調べることで明らかになる。教師からの影響力が大きいと考えられる前方の席と影響力の圏外

になる後方の席を選択するそれぞれの学生グループの特性をパーソナル・スペースの観点から分析する。

③講義を受けている学生の性格特性は座席の選択行動に表わされている。本調査では、座席位置の移動軌跡と性格特性との関係を明らかにすることによって、個々の学生の個性を理解することにした。

〈研究目的〉

- (1) 講義ごとの座席位置の移動距離と学業成績および性格特性との関係を検討する。
- (2) 試験当日の座席位置と学業成績との関係を検討する。
- (3) 学業成績と性格特性との関係を検討する。

〈手続〉

講義ごとの学生の着席位置を調べるため、「机の位置を記入した講義室の見取り図」を講義中にまわし、各学生に自分の座っている机の箇所に自分の名前を記入させた。この調査を、最初の講義から夏休み前までの7回と夏休み後の最初の講義の計8回実施した。夏休み直前の講義日には、あらかじめ予告しておいた学業試験を実施した。

調査終了後に、顕在性不安検査（以下、MASと略称）とY-G性格検査を実施した。

被験者は、大学三年生95名（女性3名）であった。

〈分析方法〉

(1) 座席の移動距離の分析は次のようにした。座席の移動距離は、各被験者ごとに机の位置の縮尺図上に毎回の座席位置を記入し、講義日順に着席位置の相対的距離を測定した。なお、縮尺図上での隣接した座席間の距離は7mmであった。ただし、女性および調査日に3日以上欠席した被験者は分析の対象から除外した。また、調査日に連続して出席しなかった被験者の移動距離も分析の対象から除外した。

(2) 学業成績（心理学）の全体の平均点は67.0(SD13.58)であった。この結果を基にして、被験者の成績の偏差値が55以上の成績高得点者群（29名）と偏差値45以下の成績低得点者群（36名）の2群に分けて分析を試みた。

(3) MASの得点の平均は14.01(SD7.82)で、一般男子の基準（顕在性不安検査使用手引 三京房、平均13.34(SD7.79)）に近似していた。この結果をもとに、一般男子の基準に従い、被験者を、MAS得点19の高得点者群（22名）とMAS得点9以下の低得点者群（26名）の2群に分けて分析した。

(4) 学業試験当日の座席位置について。学業試験日は一週間前に予告した。したがって、当日、各被験者は試験を受けるのに都合の良い座席を選択していたと考えられる。試験当日の座席位置と学業成績およびMAS得点との関係を分析した。

(5) 以上の他、補足的な意味で、事例による分析を試みた。

〈結果と考察〉

(1) 調査対象となった授業で使われた講義室の座席の使用頻度は、図1の通りであった。この講義室では、より後方の席と出入口に近い側の席において使用頻度がより高くなるという傾向がみられた。また、教卓に近い前列部ほど使用頻度が低く、とくに中央部の前方3分の1の空間領域では着席行動が回避されるという傾向がみられた。

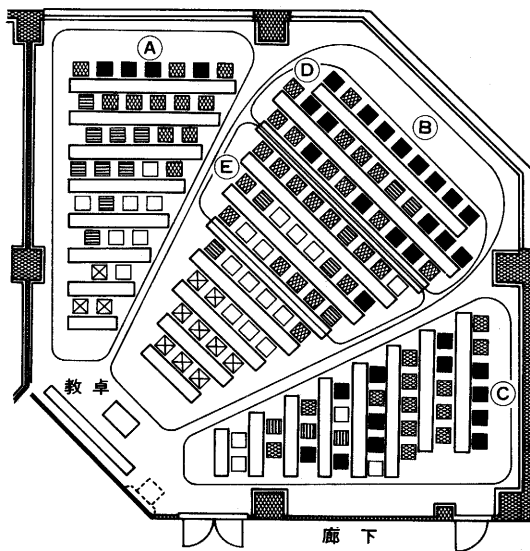


図1 調査対象となった講義室の座席使用頻度の分布

■：7～8人 ▨：5～6 ≡：3～4
 ▤：1～2 □：0

なお、この講義室は後方になるにつれてゆるやかに高くなっており、各座席は前列の座席と互い違いになるように設計されている。出入口は通路側の一方にしかない。後方の左側の3分の2の壁面は大きな窓ガラスになっており、外がよく見える。

(2) 調査実施日ごとの座席の移動距離と成績および、MAS との関係調べた。

①図2は、学業成績の高得点者群と低得点者群の座席の移動距離を示している。(1~2)回間から(5~6)回間までの変化をみると、高得点者群は漸減し、低得点者群は漸増している。講義への出席回数が増えるにつれて座席の移動距離が大きくなるということは、低得点者においては、授業に対する態度がよりネガティブになってくるとことを示唆していると思われる。

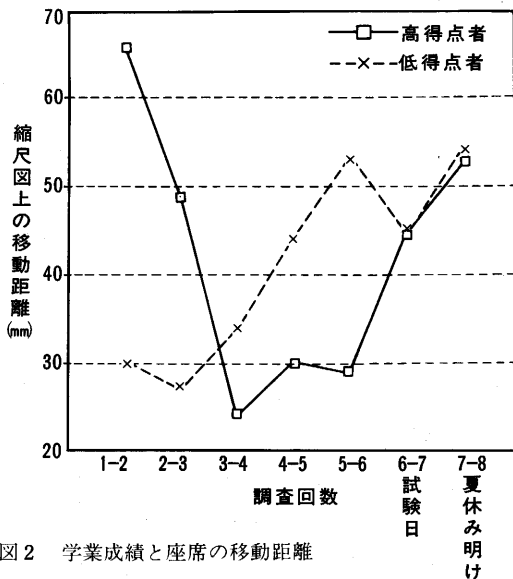


図2 学業成績と座席の移動距離

②着席位置の移動の方向性を調べてみると、高得点者には教室の左右への移動が比較的多く認められるのに対し、低得点者には移動の一貫した方向性がみられず、移動の不安定さが認められる。

③図3は、MASの高得点者群と低得点者群の座席の移動距離の変化を示している。(1~2)回間から(5~6)回間までにおいては、高得点者群は低得点者群より移動距離が小さい($t=2.731, p<.01$)。また、高得点者群の移動距離は(2~3)回間で降漸増しているのに対し、低得点者群のほうは漸減している。このことから、不安得点の高低によって、座席位置の固定化の過程に相違のあるらしいことが知られた。

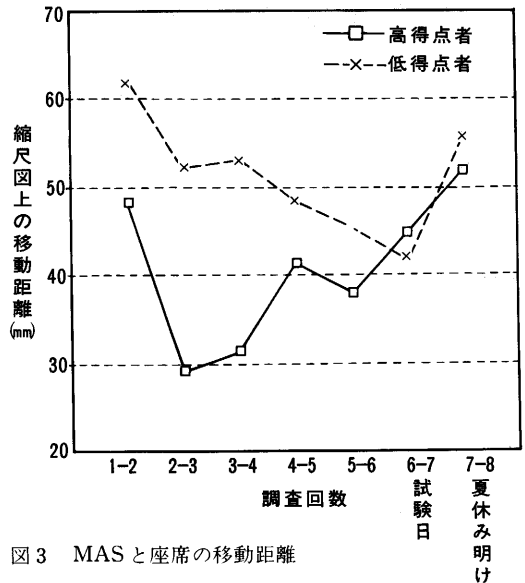


図3 MASと座席の移動距離

④試験日の席の移動は、成績およびMASとの関係では、高得点者と低得点者との間にほとんど差のないことがわかる。しかし、成績に関しては、高得点者の方が移動距離が大きい($t=2.04, p<.05$)。良い成績をとった学生は、普段とは違って、試験を受けるのに適した席に敏感に反応し、その結果移動距離が大きくなったものと考えられる。

⑤夏休み明けの第1回目の講義では、成績およびMASの得点の高低にかかわらず移動距離が大きい。このことは、夏休み前の座席に対する固定化傾向が休み中に崩れてしまったことを示していると思われる。

(3) 試験当日、図1に示す各領域に座っていた学生の試験成績を比較した。その結果、領域D(成績の平均点: 66.78 (SD 13.28))とE(73.35 (SD 12.59))の間に有意差($t=2.091, p<.05$)がみられた。また、A(63.36 (SD 12.21))とB(70.02 (SD 13.67))の間にも一つの傾向($t=1.908, p<.10$)が認められた。

このことから、中央の領域Bにおいては後方に座っている者より前方に座っている者の方が成績がよく、また、一番奥の領域Aに座っている者は中央に座っている者より成績が悪いという傾向のあることがわかった。

(4) 図1と同じ領域に座っていた者のMAS得点の比較をした。その結果、領域B(MAS得点の平均12.15 (SD 7.26))と領域C(16.62 (SD 8.93))の間で有意差($t=2.070, p<.05$)が認められた。このことから、出入口近くの領域Cに座る者は、中央の領域Bに座る者に比べ、

不安得点が高いことが示唆された。

(5) 学業成績とMASとの間には有意な相関はみられなかった ($r = -.151$) が、成績高得点者-低得点者とMAS高得点者-低得点者について検討すると、MASの高い者は成績がふるわないという傾向 ($p = .089$ 直接確率計算法による) がみられた。

3. 研究II：事例による着席行動の分析

研究Iで明らかになった平均から大きく逸脱した学生の特色を、着席位置の移動軌跡の観点から分析した。

(1) 性格特徴と着席位置の移動軌跡

① 図4は、MAS得点の高い者および低い者をその得点順にそれぞれ4名選びだし、その移動軌跡を示したものである。高得点者の傾向として、No.42を除くと、第2回目の移動が大きく、その後の移動は小さいことがわかる。また、低得点者は、毎回移動距離の大きいことがわかる。

これらのことから、不安傾向のきわめて高い者は、3回目の出席時点ではほぼ自分の席が定まり、その後この席の近くの空間に固執する傾向があるといえそうである。一方、不安傾向のきわめて低い者は特定の空間に固執しないらしいことがわかった。

② Y-G性格検査で見出された典型例(A, B, E型については準型を含めた)の移動軌跡は図5ようになった。

全体的な傾向として、A型(平均型)の移動は毎回安定して大きい。C型(安定適応消極型)とD型(安定積極型)では毎回安定した中程度の移動がみられる。E型(不安定不適応消極型)では大きな移動の後に特定の空間に固執する傾向がうかがえる。

③ Y-G性格検査の結果を4次元に分けて検討してみた。図6の上図は「情緒的安定・社会的適応」グループと「情緒的不安定・社会的不適応」グループの移動軌跡である。

情緒安定グループでは毎回安定した中程度の移動がみられるのに対し、情緒不安定グループでは2回目の移動が大きく、その後特定の空間に固執する傾向がうかがえる。

図6の下図は「活動的・衝動的・内省的でない・主導権を握る」グループと「非活動的・非衝動的・内省的・非主導的」グループの移動軌跡である。「活動的・衝動的・内省的でない・主導権を握る」グループのほうが毎回安定した中程度の移動をしているのがわかる。

(2) 成績の高低およびMASの高低と移動距離の変化

学業成績の高低とMAS得点の高低(いずれも分析方法の項で述べた分類基準に従った)の組合せにより、成績高・MAS高 ($N = 4$)、成績高・MAS低 ($N = 5$)、成績低・MAS高 ($N = 7$)、成績低・MAS低 ($N = 4$) の4群を分析対象とした。いずれも被験者が少ないので統計的な検定は行なわなかった。

全体的な傾向は次の通りであった。

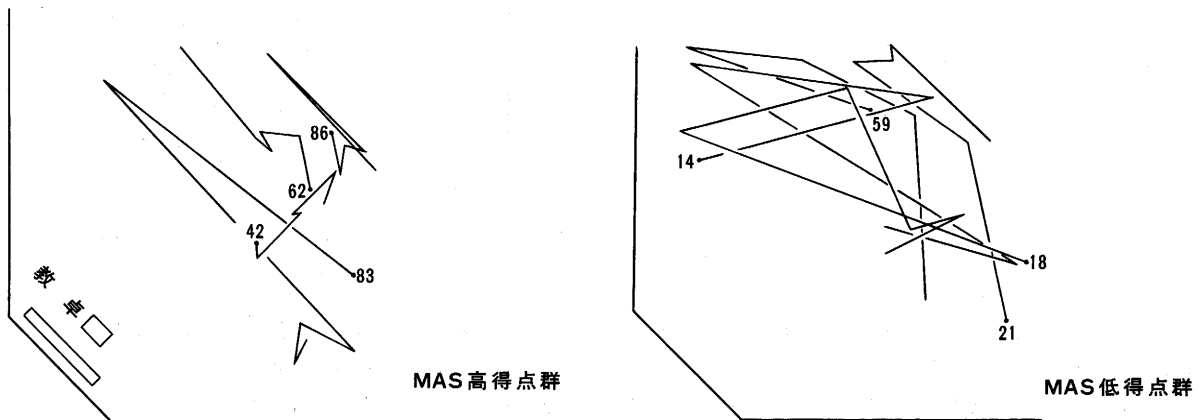


図4 MASの高得点群と低得点群の移動軌跡

— No.83の第1回目の着席位置を示す

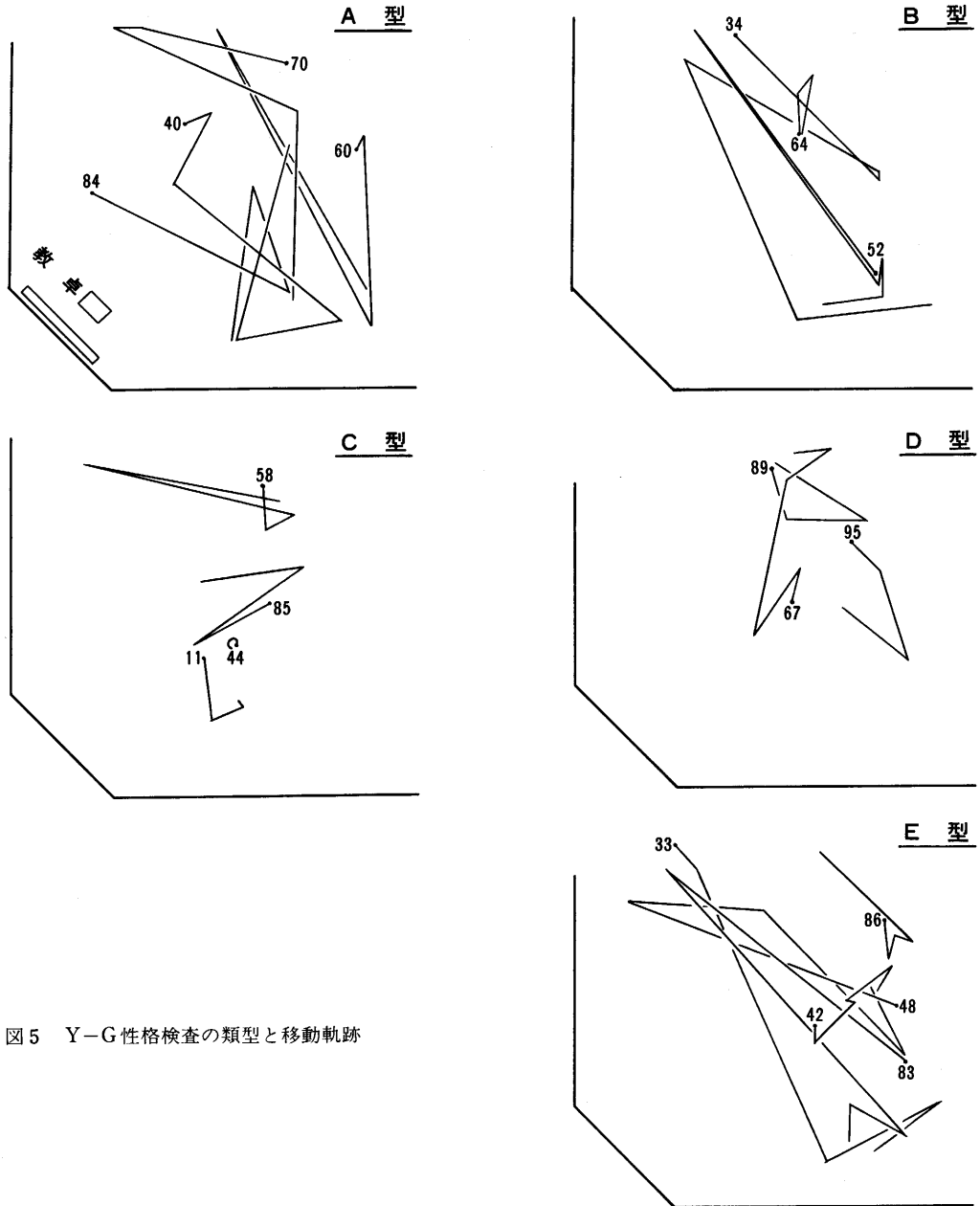


図5 Y-G性格検査の類型と移動軌跡

①学業成績の高得点者のうち不安傾向の高い者は低い者より全体的に移動が小さい。

②試験の前までの講義日についてみると、成績高得点者は移動が漸減しているのに対し、成績低得点者は漸増しており、対照的な変化をみせている。

③試験日の移動については、成績低得点者でMAS低

得点者の移動が他の3群に比べきわめて小さくなっている。これに対し、成績高得点者は移動が大きくなるが、なかでもとくにMAS高得点者は移動がきわめて大きい。このことは、不安傾向の高い者で良い成績をあげようとした者は、試験に適した席を求めて大きく移動したということを示している。

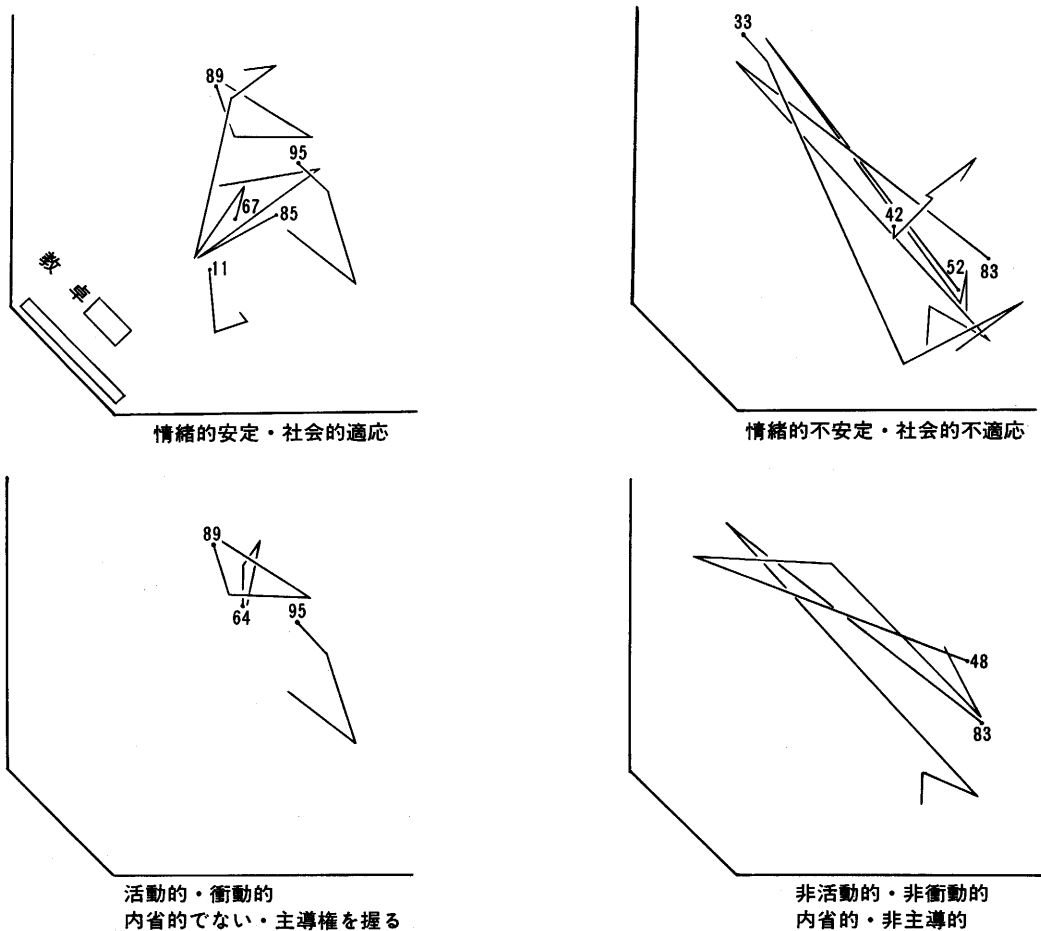


図6 Y-G性格検査の4次元の移動軌跡

4. 結論

(1)調査対象とした講義室では、教卓から遠く離れた後方の席と出入口に近い側の席の使用頻度が高かった。また、前列ほど使用頻度が低く、とくに中央部の前から3分の1の列はほとんど利用されていなかった。

前方の席は教師からの圧迫感があり、eye-contactも頻繁になるので講義が受けにくい、後方の席は教師からの影響の圏外になり、息抜きしやすいことが考えられる。また、出入口近くの席が好まれたのは、このあたりの席が利用しやすいということのほか、席の後方が壁になっているため、教師がこの領域に目を向ける頻度が少なかったことなどが考えられる。

講義室での教師との対人場面に適応するため、学生は教師に対するパーソナル・スペースを巧みに利用してい

ることがわかる。

(2)試験当日の学業成績をみると、講義室の中央部分の後方領域に座っていた者の成績が最も悪く、また中央部分よりも出入口から最も遠い奥の部分に座っていた者の成績も悪かった。

成績の悪かった者は自分の試験結果の悪いことを予め予想して、講義室の後方や隅の席を選択し、教師から離れた目立たない場所を選んでいたとも考えられる。こうした傾向は、成績の悪かった学生は成績の良かった学生より教師との間に大きなパーソナル・スペースを必要とする、という研究結果 (Leipold, W.E., 1963)¹⁷⁾とよく似ている。

こうしたことから、パーソナル・スペースは学生の教師に対する緊張感を軽減する役割を果たしていたものと考えられる。

(3)試験当日出入口に近い部分に座っていた者ほど不安傾向の高いことがわかった。ストレスや不安のある場所では、出入口に近い席は、不安傾向の高い者にとって安心感を与える場所であることが示唆された。

(4)座席の移動軌跡の変化は次の3つに大別できた。

第1は、最初大きく移動し、その後特定の空間に固執する軌跡を示すタイプで、学業成績の高得点者、不安傾向の高い者、Y-G性格検査の不安定適応消極型(E型)の者がこれに該当する。これらの者は、早い時期に自分のなわばり空間を形成し、この空間の中で初めて安心して講義を受けることができたものと思われる。

第2は、講義が重なるにつれてますます移動が大きくなるタイプで、学業成績の低得点者にみられた。これらの者は、教室の中になわばり空間をつくることができず、勉強にも身が入らなかったものと思われる。

第3は、毎回ほぼ一定した大きさの移動をするタイプで、上記以外の多くの者がこれに該当した。

以上の結果から、学生の教師あるいは授業に対する態度と学生の教師に対するパーソナル・スペースのとり方との間には一定の関連性のあることが示された。

文 献

- 1) Hediger, H. 1950 Wild animals in captivity. London: Butterworth. (Hall, E. T. 1966 The hidden dimension. Doubleday.)
- 2) 渋谷昌三 1981 「人の集り」についての一考察. 学習院大学文学部研究年報, 28, 153-175.
- 3) Edney, J. J. & Jordan-Edney, N. L. 1974 Territorial spacing on a beach. *Sociometry*, 37, 92-104.
- 4) Smith, H. W. 1981 Territorial spacing on a beach revisited: A cross-national exploration. *Social Psychology Quarterly*, 44, 132-137.
- 5) Hoppe, R. A., Greene, M. S. & Kenny, J. W. 1972 Territorial markers: Additional findings. *Journal of Social Psychology*, 88, 305-306.
- 6) Felipe, N. J. & Sommer, R. 1966 Invasions of personal space. *Social Problems*, 14, 206-214.
- 7) 市橋秀夫 1979 比較行動学的見地よりみた精神分裂病の精神病理: ナワバリ行動障害の問題を中心に. *精神神経学雑誌*, 81-9, 587-605.
- 8) Sommer, R. 1969 Personal space: The behavioral basis of design. Prentice-Hall. 梶山貞登 (訳) 1972 人間の空間: デザインの行動的研究 鹿島出版会
- 9) Hare, A. & Bales, R. 1963 Seating posting and small group interaction. *Sociometry*, 26, 480-486.
- 10) 渋谷昌三 1985 パーソナル・スペースの形態に関する一考察. 山梨医科大学紀要, 2, 41-49.
- 11) Levine, D. W., O'Neal, E. C. & McDonald, P. J. 1980 Classroom ecology: The effects of seating position on grades and participation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6-3, 409-412.
- 12) Stires, L. 1980 Classroom seating location, student grades, and attitudes: Environment or self-selection? *Environment and Behavior*, 12-2, 241-254.
- 13) Becker, F. D., Sommer, R., Bee, J. & Oxley, B. 1973 College classroom ecology. *Sociometry*, 36, 514-525.
- 14) 北川歳昭 1980 座席行動の研究(2)一教室内の座席行動と性格特性. 中国短期大学紀要 11, 32-45.
- 15) 平尾武久・台弘 1964 講堂における座席の成立一 個体行動の類型化とその Dynamics - . *精神神経学雑誌*, 66, 987-1003.
- 16) 深沢文彦・西形雄次郎・菱山珠夫 1965 慢性分裂病者の行動特性一 座席の生態学的研究 - . *精神神経学雑誌* 67, 1197-1205.
- 17) Leipold, W. E. 1963 Psychological distance in a dyadic interview. Ph. D. thesis, University of North Dakota. (Sommer, R.⁸⁾, 1969)

Abstract

Proxemics of college classroom : Analysis of seating position

Shozo SHIBUYA

A seating position in a college classroom provides a variety of information on individual students. In this paper, the relationship between seation, school performance and personality was analyzed from the aspect of personal space and territory. Seating positions were surveyed continuously for eight times. The school performances were based on the results of examination carried out during the survey. The personality were examined by MAS and Y-G tests.

Analysis revealed the following. (1) Rearward seats and seats near the entrance and exit were especially frequently occupied. (2) The school performance was poorest in students seated at the rear of the central space of the classroom. (3) Students seated near the entrance and exit showed a stronger anxiety tendency compared to students seated at other spaces of the classroom.

The analysis results of case study indicated a close correlation between the preference for a seating position and the Y-G test results.

Department of Psychology